

コーチの社会的勢力と選手の原因帰属様式

伊 藤 豊 彦*

Toyohiko Iro

Perceived Coaches' Social Power and Athletes'
Attributional Styles in Physical Education and Sports

The purpose of this study was to examine the relationships between athletes' perception of coaches' social power and athletes' attributional styles in physical education and sport settings. The subjects were 117 athletes in highschool sport clubs. They were administered two questionnaires; one was to measure the perceptions of their coach's social power, consists of seven subscales named as expert power, punishment power, benefit power, enthusiasm power, legitimate power, affiliation and acceptance power, and reference power, respectively. The other was to measure the attributional styles they made in physical education and sport settings. The main results as follows: The punishment power was positively correlated with attribution of positive and negative events to ability. The benefit power, enthusiasm power, and reference power were positively correlated with attribution of positive events to effort and negatively correlated with attribution of positive events to ability. These results and its implications to motivation in sport coaching were discussed.

問 題

本研究の目的は、スポーツ指導者（以下、コーチと呼ぶ）がいかなる社会的勢力を保持しているかという選手の認知とスポーツ場面における成功・失敗に対する選手の原因認知（原因帰属様式）との関係を明らかにしようとするものである。

これまで、スポーツ心理学の領域でも、選手の成功・失敗に対する原因帰属が動機づけに及ぼす影響が検討され、成功・失敗についての原因帰属のあり方が動機づけや動機づけの総合的指標としての競技成績並びにスポーツ行動の実施の程度を規定する重要な変数であることが明らかにされてきた（たとえば、伊藤、1985；1987；1991など）。しかしながら、このような原因帰属それ自体が、どのような要因によって規定されているのかという観点

からの検討は、あまり行われていないように思われる。

ところで、Weiner (1974)によれば、このような原因帰属の先行条件となる要因として、社会的基準、過去の経験などの特定の手がかり、達成動機、自己概念などのパーソナリティ要因、原因スキーマ、強化スケジュールなどが上げられるという。特定の課題や事態についての学習者の原因帰属は、結局、本人自身の過去の経験や行動によって左右されることを考えるならば、前述した学習者の個人内要因に最も影響を受けていることは当然のことと思われる。

しかしながら、体育・スポーツの学習が教師やコーチとの相互作用場面で行われていることを考慮するならば、学習者の原因帰属は、教師やコーチとの関係のあり方によっても規定されていることが十分予想される。

事実、これまでの動機づけや学業成績の高低がいかなる要因によって規定されるかに関する従来の研究では、

* 島根大学教育学部保健体育研究室

知能や不安といったパーソナリティ要因、親子関係や出生順位といった家庭環境要因とともに教師-生徒関係などの教師にかかわる要因が取りあげられ、その影響が検討されている。例えば、deCharms (佐伯訳, 1980) は、教師の指導態度を測定する質問紙を開発し、自律的学習を奨励する教師の指導を受けている生徒は、統制的な指導を受けている生徒よりも学業成績が高いことを指摘している。また、我が国でも、杉原・桜井 (1987) は、外的報酬の内発的動機づけに及ぼす影響を明らかにするために外的報酬に類似した外的要因として教師のリーダーシップを取り上げ、教師のリーダーシップのあり方が、児童の内発的動機づけに影響を及ぼしていることを報告している。

以上の研究の結果は、教師の行動や態度に規定されると考えられる教師と生徒の良好な人間関係が、生徒の動機づけやそれに基づく成績に影響を及ぼすことを示唆している。したがって、スポーツ指導場面を扱おうとする本研究の場合においても、コーチと選手とのポジティブな人間関係が、学習者である選手の原因帰属のあり方に影響を及ぼす可能性を示唆するものと考えられるのである。

ところで、体育・スポーツの学習場面で教師やコーチが指導を行い、学習者である生徒や選手がそれに従うというプロセスは、社会的影響過程としてとらえることが可能であり、このような社会的影響過程を説明する際に用いられる重要な概念の1つとして、社会的勢力 (social power) がある。社会的勢力とは、一般に、社会的関係にある個人間で行為の主体者 (影響者) が行為の対象者 (被対象者) に影響を与えることができる潜在的可能性あるいは潜在的能力と定義され、社会的影響の可否は、影響者が特定の勢力を持っていると被影響者が認知しているかどうかによって規定されるという。このことから、コーチが保持する社会的勢力に対する認知が高い選手ほど、コーチからの影響を受ける可能性も高いことが示唆される。したがって、コーチの保持する社会的勢力の認知と選手が自分の成功・失敗に対して行う原因帰属との間には、密接な関係が存在するであろうという仮説を立てることができる。

French & Raven (1968) によれば、このような影響の試みを可能にする社会的勢力の基盤として、報酬 (賞) 勢力、強制 (罰) 勢力、参照勢力、正当勢力、専門勢力の5つがあるという。一方、森・伊藤・豊田・遠藤 (1990) は、スポーツ指導場面におけるコーチが保持する社会的勢力の基盤として、①専門・参照勢力、②罰勢力、③利益勢力、④指導意欲勢力、⑤正当勢力、⑥親近・

受容勢力の6つの因子を抽出している。^{注1)} 専門・参照勢力は、コーチが専門的な知識や技能を保持するという認知とコーチに対する同一化への欲求から、罰勢力は、コーチから罰を受けることの子想やコーチへの畏怖から、利益勢力とは、指導を受けることが技術の向上など自分の利益につながることに期待から、指導意欲勢力は、コーチの指導に対する熱意や積極的態度を認知することから、正当勢力は、指導に従うことを当然と認知する内在化された規範から、親近・受容勢力は、コーチとの心理的距離の近さと受け入れてもらえるという印象から、それぞれコーチからの影響を受け入れている様子を示している。

さらに、森他 (1990) の結果によれば、コーチの保持する社会的勢力はそれらの種類によって異なる機能を持つことが明らかになっている。すなわち、コーチの保持する社会的勢力の認知と練習への意欲との関係において、利益や指導意欲勢力との間には有意な正の相関が認められたのに対して、罰勢力との間では有意な負の相関が認められている。このことは、コーチの社会的勢力として利益や指導意欲のようなポジティブな勢力を高く認知している選手ほど練習意欲は高いのに対して、選手にとってネガティブな罰勢力を認知する選手ほど練習意欲が低いことを意味している。したがって、上記の仮説に関しても、コーチの保持する社会的勢力の種類によってその関係の程度や方向が異なると予測される。

本研究は、コーチの社会的勢力の認知と選手の原因帰属とがどのような関係にあるのかを探索的に明らかにしようとするものであり、本研究で用いるすべての社会的勢力の種類との関係について予測を立てることはむずかしい。しかしながら、前述した研究結果から少なくとも次のような仮説を立てることができよう。すなわち、利益勢力と指導意欲勢力に対する認知と動機づけにとって望ましい原因帰属様式との関連、および罰勢力と動機づけにとって望ましくない原因帰属様式との関連は、他の社会的勢力の場合よりも大きいであろう。

以上まとめると、本研究では、体育・スポーツ場面における学習者の原因帰属を規定する要因の検討の一環としてコーチの保持する社会的勢力の認知を取り上げ、学習者である選手の動機づけや成績にとって望ましい原因帰属様式は、学習者と指導者の良好な関係が影響しているという仮説を検証する目的で行われた。具体的には、コーチの社会的勢力の認知を測定するための尺度と選手の原因帰属様式を測定する尺度を用いて、それらの関係が検討される。

なお、本研究では、前述した仮説を検証するために、

運動部のコーチ-選手関係に焦点をあてる。これは、運動部集団が自発的意思による参加形態をとること、指導者と選手との人間関係が比較的長期にわたる集団であること、勝敗に直接かかわるために集団の統合の強化が不可欠であるために指導者と選手との人間関係が最重要視される(坂西, 1989)ことによるものであり、このような特徴を持つ集団において、コーチの影響がより強く選手の原因帰属のあり方に反映されると考えたことによる。

方 法

調査対象

調査対象者は、公立高校の運動部に所属する選手、117名である。

調査時期

調査は、平成2年10月から12月にかけて実施した。

調査内容

原因帰属様式の測定 伊藤・豊田・杉原(1985)、伊藤(1985)及び伊藤(1987)によって開発された体育・スポーツ場面における原因帰属様式測定尺度が用いられた。

質問項目は、原因帰属の対象となる事態(原因帰属事態)とそれを引き起こすと考えられる原因(帰属因)から成り、自分にそのような出来事が起こったと仮定し、それぞれの帰属因がどの程度原因としてあてはまると思うかを「そう思う(4点)」から「そう思わない(1点)」までの4段階で評定される。

原因帰属事態として5事態が採用され、それぞれの事態ごとに回答者にとって好ましい事態(以下、正事態と呼ぶ)と好ましくない事態(以下、負事態と呼ぶ)が作成された。具体的な内容を以下に示す(カッコ内は、負事態)。

- ・初めての運動がすぐにできたとしたら(なかなかできないとしたら)
- ・競争して勝ったとしたら(負けたとしたら)
- ・他の人よりも良い記録がだせたとしたら(悪い記録しかだせなかったとしたら)
- ・スポーツテストで良い成績をとったとしたら(悪い成績をとったとしたら)
- ・前よりも記録がのびたとしたら(ほとんど記録がのびなかったとしたら)

また、帰属因としては、能力、努力、課題の困難度、運、及び体調の5つが採用された。

したがって、質問項目数は、5(原因帰属事態)×2(正・負事態)×5(帰属因)の50項目から成る。なお、

測定できる内容(下位尺度)は、①正事態-能力(以下、正-能力と呼ぶ)、②負事態-能力(以下、負-能力と呼ぶ)、③正事態-努力(以下、正-努力と呼ぶ)、④負事態-努力(以下、負-努力と呼ぶ)、⑤正・負事態-課題の困難度(以下、正・負-課題と呼ぶ)、⑥正・負事態-運(以下、正・負-運と呼ぶ)、⑦正・負事態-体調(以下、正・負-体調と呼ぶ)の7つである。それぞれの項目への反応は、下位尺度ごとに合計され、得点が高いほど各帰属因に帰属する傾向が強いことを示している。

社会的勢力の認知の測定 伊藤・森(1987)、森他(1990)、伊藤他(1992)によって開発されたコーチの社会的勢力測定尺度が用いられた。

測定できる内容(下位尺度)は、①専門勢力、②罰勢力、③利益勢力、④指導意欲勢力、⑤正当勢力、⑥親近・受容勢力、⑦参照勢力の7つであり、具体的な質問項目を以下に示す。

専門勢力

- ・監督が良い成績や記録をもっているから
- ・監督を技術的に尊敬しているから
- ・監督の経験が私よりも豊富だから
- ・監督がこの競技のことを良く知っているから

罰 勢 力

- ・監督の罰がこわいから
- ・監督に叱られるから
- ・監督がこわいから
- ・監督に反抗する勇気がないから

利益勢力

- ・監督に従えば私のためになるから
- ・監督の指示に従うほうがうまくいくから
- ・監督が私の欠点を直してくれるから
- ・監督の指導で技術や記録がのびるから

指導意欲勢力

- ・監督が私のことを本当に考えてくれるから
- ・監督と一緒に練習してくれるから
- ・監督がまじめな人だから
- ・監督が熱意を持って接してくれるから

正当勢力

- ・監督の言うことは守らなければならないから
- ・監督の指示だから
- ・監督に従うのは当たり前だから
- ・監督は指導者だから

親近・受容勢力

- ・監督が好きだから
- ・監督がおもしろい人だから

- ・監督が私のことをよく知っていてくれるから
 - ・監督から信頼されているから
- 参照勢力
- ・監督は私の良いお手本だから
 - ・監督のようになりたいから
 - ・監督がまじめな人だから
 - ・監督を人間的に尊敬しているから

回答は、「監督の指示や指導に従う」理由としてあてはまる程度を「よくあてはまる（6点）」から「まったくあてはまらない（1点）」までの6段階で評定される。各質問項目への反応は、下位尺度ごとに合計され、得点が高いほどその勢力に基づく監督の影響を受けていることを示している。なお、この調査では、監督やコーチなどの厳密な区分を行わずに、実際に指導にあたっている指導者について回答するように求め、このような指導者を便宜上「監督」と統一して表記した。

手続き

各運動部の顧問教員に調査の承諾を得た後、各運動部あてに、前述した2種類の内容から成る調査票を郵送した。この調査票は、顧問教員によって配布・回収された後、各運動部ごとに返送された。

結果

1. コーチの社会的勢力と選手の原因帰属様式との相関

コーチの社会的勢力が選手の原因帰属様式とどのように関係しているかを検討するために、選手によって評定されたそれぞれのコーチの社会的勢力認知得点と選手の原因帰属得点の相関を算出した。表1がそれである。

これをみると、社会的勢力と原因帰属との相関係数は、最高でも.400と全体的に低く、とりわけ専門、正当勢力においてはいずれの原因帰属様式との間にも有意な相関係数は認められなかった。これは、コーチの専門的知識

や技能を高く認知することと社会的規範としてコーチの指導を受けることを当然と認知する傾向は選手の原因帰属様式に影響を及ぼさないことを意味している。

一方、社会的勢力のうち、罰、利益、指導意欲、親近・受容、参照の各勢力は、いずれかの原因帰属要因と有意な相関係数を示していた。

まず、罰勢力は、正-能力 (.383, $p < .01$)、負-能力 (.400, $p < .01$)、正・負-課題 (.238, $p < .05$)、正・負-運 (.207, $p < .05$) にそれぞれ有意な正の相関を示している。これは、コーチの社会的勢力の基盤として罰勢力を高く認知する選手ほど、正・負両事態の原因をいずれも能力に帰属すると同時に外的要因である課題の困難度、運に帰属させる傾向があることを示唆している。

次に、利益勢力、指導意欲勢力、および参照勢力は、いずれも正-能力と正-努力との間に同様の関係が示された。すなわち、正-能力との間には負の（順に、 $-.268, p < .01$; $-.307, p < .01$; $-.267, p < .01$ ）、正-努力に対しては正の（順に、 $.263, p < .01$; $.209, p < .05$; $.205, p < .05$ ）それぞれ有意な相関が認められるのである。これらの結果は、コーチの指導を受け入れることが自らの利益となり、コーチの指導意欲を高く認知し、コーチのようになりたいと同一化への欲求を持つ選手ほど、正事態の原因を努力に帰属させ、能力には帰属しない傾向があることを意味している。なお、参照勢力は正・負-調子との間に負の有意な相関 ($-.197, p < .05$) も示されている。

さらに、親近・受容勢力に関しては、正・負-調子 ($-.204, p < .05$) と正・負-課題 ($-.214, p < .05$) において、それぞれ有意な負の相関が示されている。これは、選手がコーチを身近な存在であると感じたり、自分を受け入れてもらえると感じているほど、外的要因である調子や課題の困難度要因に帰属しない傾向があることを示している。

表1 コーチの社会的勢力と選手の原因帰属様式との相関係数 (N=117)

原因帰属下位尺度	社会的勢力下位尺度						
	専門	罰	利益	指導意欲	正当	親近・受容	参照
正-能力	-.095	.383**	-.268**	-.307**	-.009	-.180	-.267**
負-能力	.134	.400**	-.058	-.144	.084	-.163	-.065
正-努力	.132	-.040	.263**	.209*	.166	.127	.205*
負-努力	-.012	.124	-.016	.056	-.053	.089	.056
正・負-調子	-.068	.113	-.107	-.194	.026	-.204*	-.197*
正・負-課題	.109	.238*	-.114	-.142	.118	-.214*	-.146
正・負-運	.037	.207*	-.100	-.091	.111	-.150	-.078

* $p < .05$, ** $p < .01$

表2 重回帰分析の結果（標準偏回帰係数と重相関係数）

原因帰属下位 尺 度	社会的勢力下位尺度							重相関係数 (df=7,109)
	専 門	罰	利 益	指導意欲	正 当	親近・受容	参 照	
正 - 能力	.035	.401**	-.005	-.336*	-.050	.212	-.152	.507**
負 - 能力	.212	.377**	.126	-.297*	-.151	-.129	.078	.467**
正 - 努力	-.184	-.023	.246	.111	.135	-.105	.082	.301
負 - 努力	-.164	.210*	-.080	.087	-.080	.080	.124	.229
正・負-調子	.040	.100	.172	-.124	.010	-.071	-.207	.263
正・負-課題	.353*	.115	-.046	-.056	-.015	-.149	-.195	.371*
正・負-運	.037	.151	-.107	.012	.070	-.152	.061	.261

* $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

2. 社会的勢力認知を説明変数とした重回帰分析

前項では、各社会的勢力を独立したものとして扱い、原因帰属との関係を検討したが、ここでは、コーチの社会的勢力全体として、選手の原因帰属様式とどのような関係にあるのかを明らかにするために、7つの社会的勢力認知得点を説明変数とし、各原因帰属得点を目的変数とした重回帰分析を行った。表2は、その結果を示したものである。

まず、社会的勢力の各原因帰属要因に対する重相関係数をみると、正-能力 (.507, $p < .01$)、負-能力 (.467, $p < .01$) および正・負-課題 (.371, $p < .05$) においてのみ有意な値が示された（自由度は、いずれも7/109）。次に、各社会的勢力の標準偏回帰係数をみると、まず、専門勢力は正・負-課題 (.353, $p < .05$) において有意な値を示していた。これは、コーチの社会的勢力のうち、専門勢力を高く認知する選手ほど成功・失敗の原因を課題の困難度のせいにする傾向があることを意味している。

また、罰勢力は正-能力 (.401, $p < .01$) と負-能力 (.377, $p < .01$) に対して有意な値であった。この結果は、選手がコーチの社会的勢力として罰を高く認知する場合、成功・失敗いずれの原因も能力のせいにする傾向があることを示している。さらに、指導意欲勢力は、正-能力 (-.336, $p < .10$) と負-能力 (-.297, $p < .10$) に対して有意な傾向を示した。コーチの社会的勢力として選手が指導意欲勢力を高く認知するほど成功・失敗いずれの原因も能力のせいにしなない傾向があるのである。

3. 社会的勢力認知における上位群・下位群の比較

ここでは、コーチの社会的勢力と選手の原因帰属様式との関係をより明確にするために、選手個人を単位とした分析を行う。

まず、コーチの各社会的勢力認知得点ごとに平均+

1/2SDの値を算出し、それ以上の得点のものをHigh群、平均-1/2SD以下の得点のものをLow群として、両群の原因帰属得点の平均を比較したのが表3である。

まず、社会的勢力の専門勢力については、High群とLow群とのいずれの原因帰属得点の平均値の差にまったく有意差が認められなかった。これは、コーチに対する社会的勢力としての専門勢力の認知は、選手の原因帰属様式に影響しないことを意味している。

罰勢力については、正-能力、負-能力、正・負-課題において、High群の平均がLow群の平均より有意に高く、正・負-運では高い傾向が認められた。この結果は、コーチの社会的勢力として罰勢力を高く認知する選手は、そうでない選手よりも、成功・失敗いずれの原因も能力、課題の困難度、運の要因に帰属する傾向があることを示している。

利益勢力に関しては、正-能力において、Low群の平均値がHigh群の平均値より有意に高く、正-努力と正・負-課題においては、High群の平均値はLow群の平均値より有意に高い。これは、コーチに対して利益勢力を高く付与している選手は、正事態の原因を努力に帰属する傾向があるのに対して、コーチの利益勢力を低く認知している選手は、正事態の原因を能力に帰属しやすいことを示している。

指導意欲勢力では、正-能力において、Low群の平均値がHigh群の平均値より有意に高く、正-努力においては、High群の平均値はLow群の平均値より有意に高い。これは、利益勢力と同様に、コーチに対して指導意欲勢力を高く付与している選手ほど、正事態の原因を努力に帰属するのにに対して、能力には帰属しない傾向があることを意味している。

正当勢力については、正-努力と正・負-課題において、High群の平均値はLow群の平均値より有意に高い。コーチに対して正当勢力を高く付与している選手は、そ

表3 各社会的勢力ごとのHigh群, Low群における原因帰属得点の比較

原因帰属		専門		罰		利益		指導意欲		正当		親近・受容		参照	
		Low N=36	High N=36	Low N=33	High N=35	Low N=28	High N=41	Low N=25	High N=32	Low N=32	High N=38	Low N=33	High N=31	Low N=35	High N=36
正一能力	M	13.31	12.17	10.94	14.37	13.82	11.59	14.40	11.81	12.97	13.03	14.30	12.68	14.40	11.69
	SD	3.82	4.26	3.75	3.94	3.51	4.17	3.54	4.13	3.60	4.15	3.75	3.81	3.42	4.27
	t	1.179		3.618***		2.300*		2.455*		< 1		1.687*		2.905**	
負一能力	M	12.61	13.69	11.82	14.77	13.39	13.22	13.76	13.09	12.59	13.95	14.00	12.65	13.37	13.28
	SD	3.73	3.61	3.83	3.71	3.20	3.94	3.60	4.15	3.75	3.73	3.46	3.71	3.60	3.83
	t	1.230		3.178**		< 1		< 1		1.494		1.483		< 1	
正一努力	M	16.58	17.00	17.21	16.71	15.39	17.54	15.68	17.31	16.25	17.11	16.45	16.94	16.06	17.14
	SD	2.77	2.38	2.85	2.75	2.69	2.55	2.54	2.47	2.92	2.46	2.82	2.63	2.79	2.68
	t	< 1		< 1		3.314***		2.398*		2.353*		< 1		1.640	
負一努力	M	13.03	12.94	13.03	13.74	13.00	12.71	12.92	13.78	13.06	12.92	13.33	13.87	13.63	13.33
	SD	3.77	4.02	4.34	4.31	3.65	4.45	4.16	3.71	3.82	4.23	4.15	3.53	3.72	4.17
	t	< 1		< 1		< 1		< 1		< 1		< 1		< 1	
正・負一調子	M	27.33	26.50	26.70	27.71	27.07	26.22	27.52	25.81	26.09	26.92	29.21	25.68	28.37	26.03
	SD	5.93	5.40	6.21	5.61	5.33	5.19	6.39	5.25	5.59	4.70	5.78	5.68	6.01	5.70
	t	< 1		< 1		< 1		1.089		< 1		2.421*		1.660*	
正・負一課題	M	26.19	27.67	25.36	28.23	24.46	26.93	27.84	26.84	25.28	27.71	29.21	25.77	28.03	26.61
	SD	5.60	5.10	5.86	4.79	5.22	4.85	5.67	5.14	5.26	4.30	5.28	4.97	5.46	5.50
	t	1.156		2.184*		1.984*		< 1		2.096*		2.638*		1.076	
正・負一運	M	25.72	26.25	24.03	26.69	26.00	25.68	26.84	26.50	24.75	26.37	27.33	25.68	27.06	26.47
	SD	5.99	6.34	5.87	6.30	5.99	6.16	6.98	5.78	6.24	5.94	6.84	5.47	6.19	6.00
	t	< 1		1.772*		< 1		< 1		1.095		1.045		< 1	

*p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

注) 各原因帰属得点の範囲は、正一能力から負一努力までが4~20点、それ以外は8~40点である。

うでない選手よりも、正事態の原因を努力に帰属するとともに正・負事態の原因を課題の困難度に帰属する傾向が認められるのである。

さらに、親近・受容勢力については、正・負一調子と正・負一課題において、Low群の平均値がHigh群の平均値より有意に高く、正一能力では差の傾向がみられる。これは、コーチの社会的勢力として親近・受容勢力を高く認知している選手は、正・負事態の原因を調子や課題の困難度要因に帰属しない傾向があることを示しているのである。

最後に、参照勢力では、正一能力において、Low群の平均値がHigh群の平均値より有意に高く、正・負一調子では差の傾向がみられる。これは、コーチに対して参照勢力を高く付与している選手は、そうでない選手と比較して、正事態の原因を能力に帰属しない傾向があることを示唆している。

考 察

本研究の結果から、コーチの社会的勢力に対する選手の認知と選手の原因帰属様式との間には以下のような関係があることが明らかとなった。

まず第1に、コーチの社会的勢力認知のうち、罰勢力の認知と能力帰属および課題の困難度など外的要因への帰属との間に密接な関係が認められたことである。ここ

で罰勢力とは、コーチから罰を受けることの予想やコーチへの畏怖からその罰を回避するためにコーチからの影響を受け入れていることを意味しており、コーチと選手とのポジティブな関係を示すものではない。本研究の結果は、このようなコーチの罰勢力を高く認知する選手ほど、正事態の原因は自己の能力によると認知し、負事態の原因は自己の能力不足に帰属させる傾向があると同時に、正・負事態の原因を課題の困難度や運に帰属させる傾向が認められたのである。

原因帰属理論によれば、正事態の原因を能力に帰属することは、自己の能力への自信を高め、将来の成功への期待を高めることから動機づけにとっては望ましい帰属と考えられている。しかしながら、正・負事態の原因を外的要因や、負事態の原因を能力不足のせいにするのは動機づけを阻害する影響を及ぼすことが明らかにされている。特に、負事態の原因を能力不足のせいにする帰属様式は、将来の成功への期待を低下させ、失敗に対する負の感情を高めることを通じて動機づけや成績を低下させる帰属であり、体育学習場面でしばしば問題とされる「運動ざらい」の子どもの典型的な帰属としても報告されている(伊藤, 1985)。

ところで、このような動機づけにとって相反する正・負事態の能力帰属とコーチに対する罰勢力の認知との関連がともに強かったことを示す本研究結果はどのように解釈されるのであろうか。これに関しては、コーチの罰

勢力を選手が認知する場合の背景となるコーチの行動を検討することが手がかりとなる。コーチのリーダーシップ行動と勢力認知との関係を検討した伊藤・豊田・遠藤・森 (1992) によれば、選手はコーチの専制的行動を通してコーチの罰勢力を認知する傾向があるという。したがって、コーチの罰勢力を強く認知している選手は、コーチが専制的行動をとりやすいと認知していることになり、その選手の最大の関心事は、コーチからの罰をどのように回避するかにあると考えられる。このような観点から、失敗した場合に自分に能力がないと帰属することは、他者すなわちコーチからの非難ないしは罰を回避できる消極的ではあるが有効な帰属であると考えられるのである。

一方、失敗した場合は自分に能力がないと考え、成功して初めて自分に能力があると考え、自己の行動が結果においてのみ評価されることを意味している。Dweck (1986) によれば、このような考え方は知能や能力が変化しないという固定理論に導かれる成績目標であり、このような目標の下では自己の能力評価を高め、低い評価をできるだけ避けようとする傾向があるという。したがって、自分が成功すると認知した課題に対しては積極的に取り組むが、失敗すると認知した課題に対しては低い評価を避けるために最初から取り組もうとしない。このような観点に立てば、能力重視、特に正事態の原因を能力のせいにする帰属様式も、長期的な動機づけにとって望ましいものではないと解釈できる。したがって、本研究から明らかにされた罰勢力と能力帰属との関連は、コーチと選手との良好な人間関係を示す勢力と動機づけにとって望ましい帰属と関連するという本研究の仮説を逆の方向から支持するものであると考えられる。

しかしながら、この結果の意味をより明確にさせるためには、コーチの性格やリーダーシップ行動など他の要因を取り上げ、より直接的な関係を検討する必要がある。

本研究で明らかになった第2点は、利益、指導意欲、参照の各勢力と正事態の原因を努力に帰属させる傾向との関連が認められたことである。すなわち、コーチの社会的勢力のうち、利益勢力・指導意欲勢力・参照勢力を強く認知する選手ほど正事態の原因を努力に帰属する傾向が強かったのである。

ここで、利益勢力とは、コーチの指導が技術の向上など自分の利益につながることへの期待から、指導意欲勢力は、コーチの指導に対する熱意や積極的態度を認知することから、参照勢力は、コーチが専門的な知識や技能を保持するという認知と同一化への欲求から、それぞれコーチからの影響を受け入れているようすを示しており、

いずれも、コーチと選手との良好な人間関係を示すものである。一方、正事態の原因を努力に帰属することは、成功した場合の正の感情を高めることを通して動機づけや成績を向上させるものである。したがって、本研究結果は、コーチと選手との良好な人間関係を示す勢力と動機づけにとって望ましい帰属と関連するという本研究の仮説を支持するものであったと考えられる。

また、正事態の原因の努力への帰属、すなわち成功が自己の努力に依存するという認知は、結果を自らがコントロールしていることを意味し、Dweck (1986) のいう知能や能力は変化するという増大理論に導かれる学習目標に対応していると考えられる。前述した成績目標とは異なって、学習目標下では過去と比較してどれだけ自分の能力が進歩したかが問題となり、当然の事ながら努力が最も重要視される。したがって、努力帰属がコーチの専門的知識や技能に基づく専門勢力ではなく、利益や指導意欲あるいは参照勢力と関連していることは、コーチ自身の指導に際しての努力を重視した指導姿勢なり行動が影響の受容を高め、選手の動機づけを高めていると解釈できるのである。

最後に、本研究では、コーチの社会的勢力のうち、専門勢力と正当勢力については選手の原因帰属様式との間に顕著な関係が認められなかった。森他 (1990) が既に指摘しているように、これらの勢力が選手に与える正負両面の効果によって原因帰属様式への一義的な影響の解釈を困難にしているのではないかと考えられる。したがって、コーチの社会的勢力が選手の原因帰属様式に影響を与える際に、いかなる要因が媒介するかを検討することは、今後に残された重要な課題の1つであると思われる。

以上の考察から、コーチの社会的勢力に対する選手の認知は、選手自身の原因帰属様式と密接に関連していることが明らかとなった。このことは、選手の動機づけに重要な意味を持つ原因帰属様式は選手の個人的要因のみならず、選手を指導するコーチの影響の仕方によっても影響を受けることが示唆されたと考えられる。また、罰勢力と能力帰属、および利益勢力・指導意欲勢力・参照勢力の各勢力と努力帰属との関連が強かったことを示す本研究結果は、コーチと選手との良好な人間関係を示す勢力と動機づけにとって望ましい帰属とが関連するという本研究の仮説を支持するものと考えられる。

最後に本研究の問題点として、以下の点が重要である。まず、本研究で用いた社会的勢力はコーチの具体的な態度や行動に基づく認知的な指標であった。したがって、選手の原因帰属様式に及ぼすコーチの影響をより明確にするためには、より具体的なコーチの態度や行動との関

係について検討を加えることが有益であろう。このような検討を通して、選手の動機づけに影響するコーチの影響がより明確になると考えられるからである。また、選手の原因帰属様式は、コーチの影響のみを受けているとは考えにくい。したがって、選手を取り巻くスポーツ集団の影響や両親の影響などを検討する必要がある。

さらに、本研究結果は認知的指標に基づく相関分析から得られたものであり、因果関係を特定できるものではない。したがって、コーチの社会的勢力や行動を変化させ、選手の原因帰属様式がどのように変化していくかを検討するといったアプローチが今後求められよう。

ま と め

本研究の目的は、コーチに対する選手の社会的勢力認知と選手の原因帰属様式との関係を明らかにしようとするものであった。公立高校の運動部に所属する選手、117名を対象に、コーチの社会的勢力に関する選手の認知と原因帰属様式を測定する質問紙調査を実施した。

主な結果は、以下の通りである。

1. コーチの罰勢力と負事態の原因を能力不足のせいにする原因帰属様式との間には密接な関連が認められ、罰勢力を強く認知している選手ほど動機づけが低下する傾向が示唆された。
2. 利益勢力、指導意欲勢力、および参照勢力と正事態の原因を努力のせいにする原因帰属様式との間には密接な関連が認められ、コーチのポジティブな勢力を強く認知している選手ほど、動機づけを維持・向上させる傾向があることが示唆された。

以上の結果から、コーチの社会的勢力は選手の原因帰属様式に影響を与えることが明らかとなり、コーチと選手との良好な人間関係を示す勢力と動機づけにとって望ましい帰属とが関連するという本研究の仮説を支持するものと考えられた。

注1 この研究では同一因子として抽出されているが、内容の検討の結果、尺度構成では異なる勢力として扱われている。

引用文献

- 坂西友秀 1989 フォロアーのパーソナリティー特性の関数としてのリーダーシップ効果 教育心理学研究, 37, 107-116.
- ド・シャーム, R. (佐伯 胖訳) 1980 やる気を育て

る教室—内発的動機づけ理論の実践— 金子書房 (deCharms, R. 1976 Enhancing motivation, Change in classroom, Irvington Publishers.)

- Dweck, C.S. 1986 Motivational process affecting learning, American Psychologist, 41, 1040-1048.
- French, J.R.P., Jr. and Raven, B. 1959 The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.), studies in social power. Michigan: university of Michigan Press. Pp.150-167.

伊藤豊彦 1985 スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質 体育学研究, 30, 153-160.

伊藤豊彦 1987 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響—スポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討— 体育学研究, 31, 263-271.

伊藤豊彦 1991 体育学習場面における児童の原因帰属様式に関する研究 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 25, 31-37.

伊藤豊彦・森 恭 1987 コーチの勢力資源に関する選手の認知—高校バレーボール部員について— 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 21, 25-30.

伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎・森 恭 1992 コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力の認知との関係 スポーツ心理学研究, 印刷中.

伊藤豊彦・豊田一成・杉原 隆 1985 スポーツにおける原因帰属様式の年齢的变化について 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 19, 57-62.

森 恭・伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎 1990 コーチの社会的勢力の基盤と機能 体育学研究, 34, 305-316.

杉原一昭・桜井茂男 1987 児童の内発的動機づけに及ぼす教師の性格特性およびリーダーシップの影響 筑波大学心理学研究, 9, 95-100.